

# 「水が飲みたい」「水を飲みたい」式表現の用法差

— 室町期の状態 —

小 川 栄 一

## 一 問題の所在

助動詞「たい」を伴った他動詞が目的あるいは対象となる名詞をとる場合、名詞に下接する格助詞には「が」「を」の二つがあり、左のような二つの表現が可能である。

水が飲みたい

水を飲みたい

後者のような言い方は外国語、特に英語などの翻訳の影響で新しく生じた、標準的でない言い方とされたことがあったようだが、松村明氏の研究により、両表現ともに室町時代の口語資料より見え始め、特に後者を正しく(標準的で)ないとする根拠のないことが明らかにされた。これを契機に両者並存の問題に関する論考がいくつか公けにされているが、多くは現代語を中心にしたもので、史的考察は未だ十分とはいえない。本稿では従来指摘された事からの再検討をも含めて、両表現の発生・成立期にあたる室町時代においていかなる用法上の差違があるのか考察を進めていく。資料として抄物、キリシタン文献、狂言本を用いる。また江戸期の状況も簡単に調査し参

考とした。

## 二 諸説の紹介と検討

調査範囲における「水(助詞)飲みたい」の用例数を「が」「を」以外の助詞をも含め一覧表にする。(表Ⅰ)

「が」「を」を比較すると、多くの資料では「を」が若干優勢であるが、虎寛本狂言集では逆に「が」が「を」の約二倍となっている。この資料の特性であるのか、時期的な推移を反映しているものなのか、明らかではない。

「水が飲みたい」式、「水を飲みたい」式言い方の違いについての論考で、管見に入ったのは次のものである。

松村明 「水を飲みたい」という言い方について(注Ⅰ文献)

田村すゞ子 日本語の他動詞の希望形・可能形と助詞(『早稲

田大学語学教育研究所紀要』八 昭和四四―九)

大江三郎 願望のタイの前でのヲとガの交替(『文学研究』(九

大)七〇 昭和四八―三)

久野暉 『日本文法研究』第四章「目的格を表わす『ガ』」(昭

表I

助詞 資料	助詞 ナシ	が	を <sup>2</sup> (たし 内1例)	をも	は	も	そ の 他
応永二十七年本論語抄	0	0	0	0	0	0	なりとも1
漢書列伝竺桃抄	0	0	0	0	0	0	をば1
史記桃源抄	0	2	3	0	0	0	の1 をば1
燈前夜話	0	0	1	0	0	0	
中華若木詩抄	0	2	3	2	2	0	
蒙求抄	0	0	4	0	0	0	の1
毛詩抄	0	0	11	5	1	1	の1
足利本論語抄	0	1	1	0	0	0	
玉塵抄 (1/5)	1	4	14	1	0	0	の1
詩学大成抄 (1/2)	1	3	4	0	0	0	
天草版平家物語	0	1	4	6	0	1	こそ1
天草版インホ物語	0	0	2	0	1	0	
虎明本狂言集	2	24	33	0	4	2	なりとも2
虎清本狂言集	0	3	8	0	0	0	
狂言記	2	37	36	3	<sup>2</sup> (たし 内2例)	3	をば2 でも1
虎寛本狂言集	1	<sup>59</sup> (補内 1例)	34	3	1	1	なりとも1 ぞ3 こそは1
鷲流狂言集	2	30	24	1	6	0	なりとも1 なり と1 ぞ9 でも2

※玉塵抄は巻1～10（全体の約1/5）、詩学大成抄は巻1～5（全体の約1/2）の調査。虎寛本の「がーたい」59例の内には、校訂者の補いによる1例をも含んでいる。

右の論考で取りあげられている問題点はそれぞれ多岐にわたるが、(I) 動詞との関連性、(II) 文構造の違い、(III) 意味の違い、の三点にまとめられる。松村氏以外は現代語中心の論及であり、本稿で扱う室町期とは隔りがあるが、現代語に観察される事実が古くからも存在していたのか確かめよう。結論を左のように整理する。  
(I a) 完全に口語化されていない漢語系の動詞のタイ形は「ガ」を取りにくい。

? 本箱が購入シタイ (久野。田村も同様)

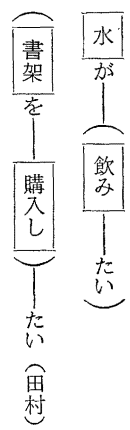
(I b) 比較的長い (複合) 動詞+タイではヲが支配的である (大江)

(I c) なんらかの意味で「私」の方向への吸収、吸引を表わす動詞 (買う、もらう、借りる、習う、知る、聞く等) はガをとりやすく、逆に「私」から外に向っての放出、離脱を表わすような動詞 (売る、上げる、貸す、教える、しらせる、話す等) はガをとりにくい (大江)

(II a) あなたの話をみんなといっしょに聞きたいのように、目的語と動詞とが連用修飾語などによって遠く離されている場合には、「が」よりも「を」がつくのがふつう (田村。松村も同様)

(II b) 「がーたい」「をーたい」の文構造の違いについて、松村、田村両氏とも同様の結論に到達している。詳しくは後節で紹介することとし、ここでは簡単に両氏の示した図解を記す。

水が+ (飲みたい)  
水 + 飲み + たい (松村)



(III a) 本箱が買いたい

は、「私が買いたいと希望しているものは本箱である」ということを表わし、  
本箱を買いたい

は、「本箱を買うという行為を行ないたい」ということを表わす (田村)

(III b) 「ぼくは水が飲みたい」では「水」は「飲みたい」の対象物として述べられており、「ぼくは水を飲みたい」では「水」は「飲む」だけの対象物として述べられている (大江)

(III c) 10 以下の例 (筆者注 | 氏の挙例は省略する。原論文を参照されたい) は、「-たい」の前に助詞が現われる時、それは音調上のきわだちと結びついて焦点の位置を示すことこの証拠になるように思われる。ヲをとる名詞も音調上のきわだちと結びつけば焦点の位置になれるが、常にそうである必要はない (大江)

諸氏の指摘を室町の実例について検討する。  
(I a) について、漢語系動詞では確かに「を」が多い。  
是ニアウテ女ノ礼ヲ談合シタイソ (毛詩抄 二二六ペ) (4)

さいはひの事じや程に、其薬水をしんせて見たひと存るが (虎明本薬水)  
誠に、某も兼々都を見物致し度いくと存る処に (虎寛本末

広がり)

その花を所望致したいがおくりやらうか(鷺流真奪)

「が」も一例管見に入った。

申しく。お新発意のお立ち姿が拝見致したうござりまする

(鷺流若菜)

石のような例外もあるが、(Ia)は認めてよいだろう。

(Ib)は、本稿の調査範囲において明瞭な傾向としてあらわれない。動詞連用形の拍数と例数との関係を表IIに示す。

表II

例数 拍数	が		を	
	こ な と り	総	こ な と り	総
1	2	33	2	39
2	11	78	21	55
3	7	15	19	34
4	4	30	9	11
5	0	0	1	1
6	1	5	1	8
複合動詞	0	0	4	4
動詞+て +動詞	2	4	10	12

※漢語系動詞の例、また動詞と「たい」との間に助動詞をはさむ例、を除く。

ことなり語数、総語数いずれにおいても、拍数の多い動詞の場合に「を」が多いという傾向は認めにくい。ただ複合動詞の場合、助詞「て」を介して動詞と(補助)動詞とが接続した場合(これらは当然拍数が多くなるが)、には「を」が優勢である。

西エクレテ飛テ行ク日ヲツナキトメタイソ(詩学大成抄五38)

オ)

お供いたひて、其水をまいらせて見たひと思ふが(虎明薬水)

ただ右の二つの場合ともに、後述するように「たい」が連体・連用修飾する例であったり、使役動詞の例であったり等、別の理由で「を」となったとみられるものが多く、右に挙げたような確例は少ない。

(Ib)は少なくとも室町期においては認められないといえそうだ。

(Ic)は動詞の表す動作の方向性との相関を指摘したもので興味深い。ただ「吸収、吸引」と「放出、離脱」という二方向を客観的基準においてどこまで判別しうるものか。方向性とはあくまでも相対的なものであり、また明確な方向性を持っていない動詞も多くはないか。ともかくも大江氏の線に沿いながら考えて表IIIの結果を得た。(漢語系の動詞は除く。意味の対となるものは左右に並べる)

総数で見ると、吸収吸引では「が」八五例、「を」四七例、放出離脱では「を」一六例、「が」三例であり、(Ic)の傾向は成立している。大江氏の論では「焦点の位置以外では」という但し書きがあつて、もし焦点を考慮していけば(表IIIではそれをしていない)もう少し明瞭となるのかもしれないが、焦点が否かの判定を客観的にするのも難しいところなので、ひとまずこのままとする。

(IIa)について、「が+連用修飾語+動詞+たい」となる例外が

いくつがあるが、

あゝ其すしが、一ほうばり、ほうばりたいなあ(続狂言記朝比奈)

お見やる通り自身太刀を持た。此太刀が、都まで持てもらひた

いと云事でありやる(虎寛二人大名)

総数では「を」の例が圧倒的で、成立しているといえる。連用修飾

表 III-1

吸 収 ・ 吸 引				放 出 ・ 離 脱			
動 詞	が	を		動 詞	が	を	
取 る	0	6		与 ふ	0	2	
はぎとる	0	1					
貰 ふ	0	1		や る	0	4	
受 く	0	1		譲 る	0	1	
いただく	6	3					
求 む	1	1					
借 る	0	1					
買 ふ	9	5					
釣 る	0	2					
				の く	0	1	
				出 す	1	0	
				入 る	0	1	
聞 く	31	7		言 ふ	1	1	
承 る	5	8		申 す	1	2	
食 ふ	10	3					
飲 む	10	2					
食 ぶ	3	2					
頬 ば る	2	1					
				参 ら す	0	2	
習 ふ	6	1					
知 る	1	2		知 ら す	0	1	
心 得	1	0					
				教へ行はす	0	1	

語を分析して表IVに示す。

(II b) (III a) (III b) は第四節で検討する。

(III c) の焦点 (Focus) という考え方はかなり魅力的に思われるが、焦点か否かの判別には文脈の慎重な解釈が要求されるであろう。調べてみると、目的となる名詞に焦点のあるときは、たしかに「が」が多いようだ。

乱ヲ避ンズルハカリコトニ、秋風力起リタレハ吳中ノ名物蓴菜ト鱸魚トガ食タイト云テ、官ヲ休テ松江へ帰タ也(中華若木詩抄下48才)

朝比奈 わだいくさのやうだいかたれきかふといはしますか 聞  
王あふその時のかせん物がたりがきくたひ(虎明朝比奈)  
△鬼もつともじゃく。さあくお姫うでおしせい △姫おれは  
はらおしがしたい(狂言記外首引)  
女それは定めて朗詠の詩の中にある物ぢやとがな、仰せられた  
ものでござらうシテそれく、その朗詠が食ひたい(鸞流岡大夫)  
「を」の例もみえる。

シテ何じや、てうちくじや 女中くシテ其てうちくを見た  
い(虎寛鬼の継子)

(総計)

表 III-2

その他	放出・離脱	吸引・吸引	方向性	
			例数	助詞
11	3	12	なりこと	が
78	3	85	総	
38	10	17	なりこと	を
104	16	47	総	

※漢語系動詞を除く

表 IV

を	が		
		に	へ
10	1	1	1
1	0	1	0
0	1	1	0
1	0	1	0
3	0	1	0
8	3	1	0
23	5	(計)	

※補充成分、連用修飾成分の  
 区別は北原保雄の説にした  
 がう。(注5)

大江氏も「ヲをとる名詞も音調上のきわだちと結びつけば焦点の位置になれるが、常にそうである必要はない」と、「を」もありうることを述べている。右の例に音調を知る手がかりを求めるとは困難ではあるが、音調を抜きに考えても、(Ⅲc)は成立しているとい  
 ってよいだろう。

### 三 傾向性の指摘

従来指摘されていない傾向性について述べる。内容は大きく、

(I) 動詞との関連性、(II) 文構造の違い、の二点である。(前節の事項に続けて通し記号をつける)

(Id) 使役の意味を含む動詞、あるいは動詞に使役の助動詞のつくととき、この場合は「を」だけで「が」はみえない

心みをさせたいが、けさからうりぞめをせぬ程にならぬ(虎明  
 おばが酒)

さて、これを人に見せたいな(同文山立)

可然賢女ヲマクラセテ教訓サセマイラセテ内外ヲ治メサセマラ  
 セタイソ(毛詩抄七五〇べ)

次の「さす」の例は「が」であるが、使役ではなく尊敬の意味である。(太郎冠者が主人に言ったことば)

花が見させられたくは、私が見させられ(続狂言記校註)

使役表現は人を介して行動を起させるものであり、前節(Ic)の「放出・離脱」の場合とも考えられる。

(Iic) 「たい」に体言が下接するとき、すなわち「たい」が連体修飾するときは、すべて「を」である

故二(「少」脱か)年ノ時ハ物ナトヲヤリタキ心アリ(応永二  
 十七年本論語抄一六〇三4べ)

始皇ノ下知ヲ下シテイワル、コトハ、吾ヲミタイ者ハミヨトイ  
 ワレタン(詩学大成抄二20ウ)

そなたを頼たひ事が有(虎明鱧包丁)

これへ参るも、ちとおびんをたのみたい事があつてきてすは

(虎清なきあま)

今度はちと腹の立た顔を見たい物じやが(虎寛鏡男)

この場合には「が」の例はみえない。ただ「たい」が「ほどに」に接する場合は、「を」とともに「が」もある。

Feige no yurai ga qigitai fodoni (天草版平家一)

さうあれば、かた／＼のすまふが見たひほどに(虎明鼻取相撲)

右は「たい」に体言がつづくとき「が」のあらわれる例外ともみられるが、しかし、そう解釈するよりも「ほどに」が接続助詞化していた証とみる方がよさそうだ。「たい」につづく体言は、「こと」「もの」「ところ」等の形式名詞の場合が多く、これらは実質的な意味が希薄であるが、体言の資格は残している。その差が「が―たい」につくかどうかによって示されるのであろう。

(II d) 「たい」に用言が下接する、すなわち「たい」(たく)あるいは「たう」の形)が連用修飾するときは、すべて「を」である

父母ハサイ／＼子ヲミタク思フニ(応永本論語抄209ペ)

太王：其第三番メノ子季歴ニ世ヲユツリタクヲモワレタ(燈前夜話149ペ)

まことに神はとけの人間をたすけたうおぼしめして(虎清葉水)

何卒総検校のを承りたう存じます(鷺流茶麩座頭)

「たい」の下にくるのは「思ふ」「存ず」「おぼしめす」等、思惟を意味する動詞である。この場合にも「が」はみえない。しかし、「たい」に「ておちる」「おちる」「ない」「ない」等の陳述をあらわす補助用言がつくときには、「を」だけでなく「が」(左第二例以下)もあ

りうる。

是はまつ御亭主の思召を承り度う御座る(虎寛鏡罪人)

それならば一刻も早うお目見えが致したうござる(鷺流今参)

声ガキ、タウモナイソ(玉塵抄一28ペ)

とても事に立ち姿が見たうおりやる(鷺流月見座頭)

いや其子細が、聞たうおちやる(狂言記鹿狩)

右は補助用言の意義実質を補うものであり、一般の連用修飾関係とは區別して扱われるべきものである。

(II e) 疑問語が目的となるときは「が」が用いられる  
何がかひたひぞ(虎明栗田口)

いかやうの仏がかいたいぞ(狂言記外金津地蔵)

書た物を見たが、大むかし中昔当世様といふて三通り有るが、わごりよは何れがならひたいぞ(虎寛音曲蟹)

ただ「を」の例も一つ管見に入った。

先大昔、中むかし、当世やうとて、三段有が、それをならひたひぞ(虎明音曲蟹)

虎寛本の右にあたる部分は既に掲げたように「が」になっている。この事実は大江氏の論ずる「焦点」に関連させて考えられる。文中における未知の内容(ここでは疑問語)はその文における焦点になりやすく、また「が」も焦点となる名詞をうけることが多い。そのため、疑問語を目的とするときには「が」の例が多いのだと説明できよう。ただ、「を」が焦点をうける場合もあるわけであり、

事実、虎明本の例のように「どれをならひたひぞ」という「を」の場合もあるが、「が」に比べて例が少ない。

(II f) 漠然と抽象化した意味の「もの」が目的となるときは「が」

表 V

資料	総数		漢語系動		使役性動		使役動詞		連修 体飾		※連修 用飾		疑問語		物	
	が	を	が	を	が	を	が	を	が	を	が	を	が	を	が	を
応永本論語抄	0	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	(1)
史記桃源抄	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
燈前夜話	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0
中華若木詩抄	2	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
蒙求抄	0	4	0	1	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0
毛詩抄	0	11	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
足利本論語抄	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
玉塵抄	4	14	0	0	0	1	0	0	0	0	0	4	0	0	0	0
詩学大成抄	3	4	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0
天草版 平家物語	1	4	0	0	0	1	0	0	0	0	0	2	0	0	0	0
天草版 イソホ物語	0	2	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0
虎明本狂言	24	33	0	2	0	4	0	0	0	1	0	0	1	1	1	0
虎清本狂言	3	8	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2	0	0	0	0
狂言記	37	36	0	1	0	2	0	0	0	3	0	5	2	0	5	0
虎寛本狂言	59	34	0	5	0	5	0	0	0	16	0	0	1	0	3	0
鶯流狂言集	30	24	1	4	0	2	0	1	0	9	0	3	1	0	2	0
(計)	166	184	1	15	0	15	0	4	0	32	0	19	5	1	12	(1)

※補助用言にかかるものを除く



だけで「を」はみえない

モノカ云タイハ、キカウ歎ト云ソ（史記抄高祖本紀(1)152ペ）

申々むかひな御方に物がといたう御ぎる（虎明入間川）

ヤイく、向ひな者に物がとひ度いと云はこちの事か（虎寛入間川）

申しく、それにござるお方に物が尋ねたうござる（鶯流川上座頭）

次にかかげる例では「物を―たい（たし）」となっているが、これは何か具体的な物質を意味するもので右掲の諸例とは異なる。

故ニ「少」脱か）年ノ時ハ物ナトヲヤリタキ心アリ（応永本論語抄一六634ペ）

右は連体修飾となる例でもあって「を」をとっている。ちなみにこれは放出離脱の例である。

以上、明らかにしたこととをまとめておく。

再確認された先学の指摘（I a）（I c）（II a）（III c）

この稿における新たな指摘（I d）（II c）（II d）（II e）（II f）

右のうち、（I a）（I d）（II c）（II d）（II e）（II f）について用例数を表Vに示しておこう。

#### 四 格表示機能と文構造の検討

事実の解釈をふまえつつ「が―たい」と「を―たい」との文法的な違いを考えてみたい。

二つの助詞のあらわす格を考えると、たとえば、

水が飲みたい

という言い方は存在するが、「たい」を取り去った、

水が飲む

という言い方は存在しない。すなわち、「が」が目的語に関わるというのも「動詞＋たい」を述語とした場合であり、「が」が一般的に目的格をあらわすわけではない。特殊な場合といえる。これは「を」が本来的に目的格をあらわすことと大きく異なる。したがって、動詞の目的語であることを明示するようなときは、一般に「を」が用いられているといえるようだ。一例として使役表現には「が」が用

いられない事実（I d）がある。使役表現においては、

誰が（主格）誰に（使役格）何を（目的格）どうした

のように、格相互の関係が明確に対比されてくる。「が」は本来主格（より古くは連体格）をあらわすものだから、主格と目的格との混同をさけるためにも、「を」が用いられるのであろう。

二つの助詞のあらわす格の違いは次のような例にもあらわれている。動作の主体と目的物とが一つの文中に接近してあらわれるときは（左の最初の例のような例外はあるものの）「が」が連続することとは一般的でない。<sup>補註</sup>

呉ノ張翰ガ、故郷ノ蓴菜ト鱸ノ鱠ガ、クイタイト呉エ帰タコトアリ（玉塵抄一〇683ペ）

吾ガ名姓ヲ紙ニカイテカウ云者ガ、御目ニカ、リタイ御礼ヲ、マウシタイト云テソノカイタ名ヲ出ソ（同四97ペ）

其人ガ、すまふをもとりほうこうをも致す者ガ、かへたひと申て（虎明蚊相撲）

田舎者ガ、地蔵を、誂へたいといふて、町中を呼ばはつてまはつた程に（続狂言記六地藏）

身どもが、試をしたいといふも別の事ではない（虎寛河原太郎）

動作主体に「が」以外の助詞(「の」「は」「も」等)がつくとときは、「がーたい」もある。

こなたは兼て教化が聞きたいと被仰て御さる(虎寛布施無経)

右の諸例は「が」の近接を避けたものと考えられるが、主格に「が」が用いられるときは目的格には「を」が用いられることに注目したい。本来的に「が」は主格、「を」は目的格であって、「が」は動作主体と、「を」は目的物との結びつきが強いのである。

「をーたい」の文の構造を图示すると左のようにならう。

→ ←  
← → (主格)  
→ ← (目的格)

私は水を飲みたい

「がーたい」「をーたい」の文構造について、松村、田村両氏の説(II b)がある。図解をみるかぎり、「をーたい」に関して若干の相違があるようだが、松村氏は、

「を」で示される希望の対象が、動詞+「たい」のうちでも特に動詞の方を志向する気持が強く表わされている

と述べ、田村氏は、

希望形動詞の目的語が「を」を伴っているのは、「目的語+を+動詞」の全体に語尾「たい」がついているものである

と述べて、「目的語+を」と動詞との結びつきの強さを指摘する点で共通している。筆者の考えは、助詞「を」の格という観点から導いたものであるが、右の点において両氏と一致している。「がーたい」について、松村氏は、

「が」で示される希望の対象が、動詞+「たい」の全体を一語的にして、その全体にかかってくる

と、田村氏は、

動詞に「たい」がつき、そうしてできた希望形が、「目的語+が」と統合している

と述べ、共に「動詞+たい」全体と「目的語+が」とが関係することを指摘している。また、北原保雄氏も、

私は水が飲みたい

と分析して、「飲みたい」が「私は」(主語)と「水が」(対象語)とに同等に關係すると述べている。「水が飲みたい」の言い方は可能であっても、「水が飲む」は不可能であることよりしても、「水が」は「飲みたい」全体に關係するとみるべきであり、筆者にも異論はない。ちなみに、前節で紹介した(III a)(III b)についてであるが、文構造に基いて語相互の意味上の關係を考えてみれば、ともに承認しうる指摘といえよう。

## 五 文体の検討

さらに文体の相違という観点から考察を進めよう。結論を先に述べると、「がーたい」はより口語的でくだけたやわらかい表現であり、「をーたい」はより文語的であらまだったかたい表現である。

左は文体の差を考えるうえの適例であらう。

(大色)いやはに川が有よ、かちわたりとは見へたが、ふかさうな、わたりせがしりたひな(太郎冠者) 誠にふかさうにみえてござるほどに、渡瀬をとひたう御さる(虎明入間川)

大名と太郎冠者の言葉遣いに身分の上下がよく反映している。大名のことは目下の太郎冠者に対してのものだけにぞんざいで敬語を用いていないのに対して、太郎冠者のは非常にいねいで「ござる」の敬語を用いている。そして、大名は「がーたい」を、太郎冠

者は「をーたい」を使っている。次をみよう。

立頭いづれもお若い衆の仰せらるるは、「米市御料人は承り及うだ美人ぢやげな。お盆を戴きたい」と仰せらるる程に、戴かせてくれさしませ。シテやあゝ何と仰せらるる。このお御料人のお盆が戴きたい。立頭なかゝシテあのこのお御料人のお

盆が。(笑)これはお若い衆の戯れ事でなござらう(驚流米市)立頭がシテに頼みごとをする場面である。立頭は下手に出て腰が低くことは遣いもいねいだが、シテは横柄な態度をとりつづけている。シテも敬語を用いてはいるが相手の頼みを一笑に付すなど高飛車な姿勢をくずさない。「がーたい」はシテが、「をーたい」は立頭が用いている。

文体の考察の材料としてさらに次の事実がある。天草版平家物語において、「がーたい」一例は物語冒頭の右馬の允のことばにあらわれているが(既掲)、「をーたい」四例はすべて喜一の語りである。天草版平家物語は全般的に当時の口語体で書かれているが、詞章の本文は覚一別本、百一十句本の平家物語に近似しており、右馬の允と喜一の対話部に比べれば文語的色彩を多分に残しているといえよう。

(Ia)も文体差のあらわれとみられる。漢語系の動詞は当時にあっても文語的であり、口語表現では文語表現よりも使われる漢語はずっと少なかったものであろう。漢語系動詞の場合に「がーたい」が少ないのは、「がーたい」が「をーたい」より口語的であるからである。<sup>9)</sup>

## 六 江戸期の状態と今後の課題

江戸期においても「がーたい」「をーたい」両表現の並立がみられるが、室町期にみられた用法に一部変化があらわれてくる。まず使役表現にも「がーたい」が用いられてくる。

皆是そなたの親の為胸に書附有るならば、爰が立ちわり見せたいと打叩いたる胸当も(近松丹波与作待夜の小室節)

一度は親にも成りをらう。胸の中が知らせたい(近松山崎与次兵衛寿の門松)

ア、御病氣でなくは且那の力が見せたいな(浄瑠璃ひらかな盛衰記)

是より又油堀の、孫兵衛が貸蔵が見せたい(洒落本辰巳之園)また、「たい」に体言が下接する場合に「が」となる例もみえてくる。

吉野初瀬の花よりも、恋しき夫が見たい物。うたてのをどりやな(近松平家女護嶋)

エ、どうぞこいつを引捕へて御褒美が貰ひたい物じやが(歌舞伎韓人漢文手管始)

おらは花より朝比奈切通の団子がくいたいものだ(黄表紙高漫齊行脚日記)

そつちへ手紙がやりたい事があつても、どふもやりにくい(洒落本遊子方言)

江戸期の状態について詳細な調査は行っていないが、ひとまず右の二点を指摘する。

「がーたい」と「をーたい」とは現在においても並立しているが、いかなる用法上の差違があるのか。室町期にみられた傾向性が江戸期を経ていかに現在に連なってくるのか。これらについては今後の課題としよう。

△調査文献

資料とした文献は次のテキストによる。

応永二十七年本論語抄、燈前夜話、蒙求抄、毛詩抄、足利本論語抄、玉塵抄、以上中田祝夫『抄物大系』。中華若木詩抄、天草版平家物語、以上『勉誠社文庫』。漢書列伝笠桃抄、尾道短期大学国文研究室、『京大附属漢書列伝笠桃抄』。史記桃源抄、亀井孝・水沢利忠『史記桃源抄の研究』本文篇。詩学大成抄、柳田征司『詩学大成抄の国語学的研究影印篇』。天草版伊曾保物語、京都大学文学部国語学国文学研究室、『文粹』五年、伊曾保物語。虎明本狂言集、笹野堅『古本能狂言集』、池田広司・北原保雄『大藏虎明本狂言集の研究本文篇』。虎清本狂言集、林田明『虎清本狂言』、『近代語研究』3。狂言記、木版本による。虎寛本狂言集、笹野堅『能狂言上中下』、『岩波文庫』。鷲流狂言集、古川久『狂言集上中下』、『日本古典全書』。その他、江戸期の資料とした諸作品は左のテキストによった。

『西鶴集上下』、『近松浄瑠璃集上下』、『浄瑠璃集上下』、『文楽浄瑠璃集』、『歌舞伎脚本集上下』、『黄表紙洒落本集』、『浮世風呂』(以上、『日本古典文学大系』)、『浮世床』、『日本古典全書』。

(1) 『水を飲みたい』という言い方について(『東京女子大学論集』一 一 二 昭二六—三)、後『江戸語東京語の研究』(昭三二—四)所収。「水を飲みたい」式言い方が正しくないとされたことも紹介されている。本稿での引用は後者による。

(2) 狂言の言語は室町時代の口語資料と一般に考えられているが、現存する文献では天正狂言本のほかは江戸以降のものであり、また舞台言語という特殊性もあって、資料的信頼性に問題がなはない。

(3) 松村氏の論文では「をも」の例も「を」に準じているが、「をも」に対する「がも」はないのだから本稿ではそのような扱いはしない。

(4) この例の「を」は「しんせて」と関係し「しんせて見たひ」とは関

係しないようにも考えられるが、

都迄此太刀が持てもらひたいと申事でおりやる(虎寛昆布売)のような「がーたい」の例もあることから、「を」は「動詞十て+(補助)動詞十たい」に關係するとみられる。

(5) 「補充成分と連用修飾成分—渡辺夷氏の連用成分についての再検討—」(『国語学』九五 昭四八—二)、『日本語助動詞の研究』本編I第五章(昭五六—二)。

(6) むしろこの場合は「が」が通常で「を」は例外的である。資料ことこの例数を示す。

	がーたいほどに	をーたいほどに
天草版平家物語	1	0
虎明本狂言集	6	1
虎清本狂言集	1	0
狂言記	2	0
虎寛本狂言集	4	0
鷲流狂言集	1	0

※上記以外の資料には「がを」とはみえない。

(7) 「助動詞の相互承接についての構文論的考察」(『国語学』八三、昭四五—二)、『日本語助動詞の研究』本編I第四章。

(8) 亀井高孝・阪田雪子翻字『ハビアン抄キリシタン版平家物語』(昭四一—一〇)、清瀬良一「天草版平家物語における口訳語の存立状態」(『国語学』七四、昭四三—九)等。清瀬氏は天草版平家の口訳について、右論文の中で、

両本文(天草版平家と古典平家のこと—筆者注)を対比してみると、前半の部分においては、おしなべて、口訳に手の加わっていると思われる語句、口語性の豊かであると思われる語句が多く見ら

れ、口訳語句の多様性が認められる。その結果、△平家V（古典平家―筆者注）の表現面とのへだたりが大きくなっている。一方、後半の部分においては、全般的に逐語訳がかなり目立ち、ある種の文語的な語詞が偏って見られるなど、△平家Vの表現面と密着した文の運びになっている。

(9) 久野暲氏（『日本文法研究』は（Ia）について）

「主語が十目的語ガ…」構文が純粹な大和ことば系の動・形容・形容動詞形に由来し、漢語系動詞をこのパターンに用いると、スタイルの不釣合いを起すことによるものかもしれない」と述べている。氏の指摘は「がーたい」だけでなく、「目的語＋ガ」となりうる構文全体（「動詞＋タイ」のほか、能力を表わす形容詞・形容動詞、内部感情を表わす形容詞・形容動詞、その他全部で六つの場合をあげている）を見わたしたうえでの発言であって、注目される。

(補注) 田中章夫氏は「助詞③」（『岩波講座日本語7 文法Ⅱ』昭五二―）

において、ガ格が重なって現われる場合に「水ガ飲みたい」が「水ヲ飲みたい」というように置きかえられることの著しいことを述べている。次に「水が飲みたい」の「水が」を文法的にどう見るかについて、主語（松村明ほか多数）、対象語（時枝誠記、北原保雄）、目的語（田村すす子、久野暲）と見解がわかれている。この問題に結着をつけることは本稿では保留したい。

付記

草稿成って後、北原保雄先生に御一読いただき、細かな点にいたるまで御批評をたまわった。田中章夫、土屋信一両先生にも御教えをたまわった。ともに厚くお礼申しあげる。

（筑波大学大学院博士課程日本語学）